

發句帳

冬之部

伊地知文庫  
文庫20  
35  
4

2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3



文庫 28  
35  
4

教句脛各部

題

伊地知氏書冊





發句題冬部

伊地知氏書冊



題

初冬力一

時雨力二

朔氣力三

落葉力四

木枯力五

霜力六

冬月力七

寒草力八

冰力九

霰力十

雲力十一

雪力十二

孤雁力十三

水鳥力十四  
千鳥

野火力十五

神乐力十六

早梅力十七

幸内春力十八



歲暮  
終次

冬  
初冬



冬  
初冬 十一

初冬月心さしあけ宿毛糸一  
うまうたむるまきしるまあか  
秋のま残るあまきし足ま津波月  
神正月うくく運るに松毛糸一  
子むいひの心乃たきし津波月  
津波月まやまぬ乃寸墨子  
神やんかまよまぬ乃津波月  
津波月みまきり冬の入はぬ  
まきりままきり乃津波月  
津波月ままきり乃津波月  
稗 休 桂 物 祓 初



時雨 才二

先づまうとせりんとまよひの世も不<sup>そ</sup>致

い<sup>中</sup>ま<sup>中</sup>なりとあつくりし君の<sup>政</sup>政江

河をまよひの世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

山<sup>中</sup>成<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

冬まよひとあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

志<sup>中</sup>これ<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

海阿のそ<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

や<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

雨<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

ま<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

川<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

う<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

む<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

と<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助

神<sup>中</sup>あつくりし世もあつくりし世もあつくりし世も不<sup>中</sup>助



きくゆき月とまを海しくれ成 敬  
川をたなまはるきゆしくゆ成 誓  
うまきのまのくくくゆりけるうね

むくくこれぬまぬくうゆ成  
とまゆや浪くくまのうく成  
神皇月まゆまをまのゆ成 祇  
海しくまゆまゆあゆり成  
秋く光ぬまあゆり成  
深くまゆまゆまゆ成  
まゆまゆまゆまゆ成  
ゆまゆまゆまゆ成  
雨りまゆまゆまゆ成  
夕しくまゆまゆまゆ成  
まゆまゆまゆまゆ成  
まゆまゆまゆまゆ成  
朝しくまゆまゆまゆ成  
あゆまゆまゆまゆ成



うらたしむるふちの物

松竹と書きて

松風とて〇もはるり又の物

冬をえりてふれはるり風の松

竹の門やぬきぬきとてはる

春ふるもはるるをまの

雨をのよとてはるる

ふとて松書てはるる

はるる松もはるぬ

松の書きてはるる

はるる松もはるる

報わるもはるる

と松もはるる

はるる松もはるる

はるる松もはるる

はるる松もはるる

来よとてはるる











浦つこし春を忘るれの音よめ

流氷の音あり

陰あり—本松忘るれの音よめ

交響の音あり

ひらく春の音よめ

明けの音あり

すくすく春の音よめ

ひらく春の音あり

はるの音あり

春の音あり

月を忘るるの音あり

玉守の音あり

月を忘るるの音あり

春の音あり

春の音あり

春の音あり

春の音あり



伊勢のりて

きよきよと風をたきし一所を  
一處を野のありありなる一初なる  
よしのきよや都のよしのりて  
そのきよなるよのきよなるよのきよなる

伊勢田浦のりて

海松やうのりて一其あるは  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる

よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる  
よのきよなるよのきよなるよのきよなる



先づるまやあまを母にうける  
心風のたふしむくまぬうける  
心水のきよくさるし 志人書

更りきく月おとるの時

まよる月をみくまの

杉の風来しとてしるは雨

まふおとる杉や知人初は雨

周柱

のくこんしおも志人しる

松のぬらひやあま葉に初は雨

あまのまを月よとまぬは

まのまをまくとまの終の初は雨

和漢

夕日影をよみぬやむしん休

風のまをいむくけ為る初は

まをまをくれ成をく家名

吾之序

浦はよむまの志く終水



旅行の人乃ため日記

邦より志く往く事よし

古摺

いとの松もやゆる

書家正地坊舞の當山白松現

勅語

らり書乃志く往く事よし

人老色山月よまへりく櫻 艱

空しれく江の流るまをよめる式

ぬ所ふうううううううううう

心志その松のひりよ老くゆめ

花やうてまくれもまのこしうす葉

るる乃をよる志く往く事よし

岸丹松志く往く事よし

温めまはるるや、年のむしくれ

松くしむしやゆめくまのふら

ゆてく不神りくゆめくまのふら

人老色山月よまへりく櫻



るは乃多し志く事そく聲ら流成 巳  
着丹松志人社成もくもひよれ  
温めまはすらんや一斗の取しんれ

松くくはくやけあくとまのらる  
すてく不神りくくぬ志くれれれ  
人志を事よくふふらんくけあ成  
所るくやけまそく事とけ成のほ  
被とめまらくや初え乃よあ成

十月二日

いんを案乃所るやまは子くふの爲  
越の二書三やうりはをる時成  
ふとくやまき乃板をのよあ成  
あ難くくくもあゆ松すくし道  
中成りふくくはくくく言社成  
まう所る成る朝りや美の成  
さくのまもあうねんくくく成  
あんくあはくらん乃松の志案



三ヶに生じ月々ふれ山夜出  
雲の影ふらぬや別集の道  
廿月れの生毛やさくらの影  
いそ世の月あてりさよ時  
月うすし時ふやさあひ  
ふそ身れけ糸おとく時  
ぬまのけ神や高あつ時  
ふそふてまきさの山夜出  
志く暮まて月あつまの影  
時ふそあつさまふたし  
次くのとまよ見たり時  
そふ客のくまあつし時  
うそまは海しあま志  
志く機平の影あつまの影  
のそふや合ふあつし  
ふそあつまの影あつし  
を母しま



その名のくろきりし時毎  
うさきと海とあまた志す  
志く禮平の越後しるまの神事

めくすや合ふかよれもしる也  
糸一あさき母あはれ初時

を母しるれ

まきあきし人ちた袖の時  
た新造のくろきりし

昌休亦三回か向才九時

とりの矢れしきなとの文時

格別申臨流と案之居位の時

お証色白あり

きくやくふくれし海きり

山聖月次

あきしきりしはしとれの時  
まきのくきりしあき時

昌休五十年子忘お札



先ん家らや中風字のさる日也

石井う徳貞次

此のなるさるあくるまのける日也

江別書いそと月分

後ふんさるわらふしくれる 仍

重ん板

濃のうさるとさるふさるた志ん徳成

残菊

露く又さくさるさるる海もさる

冬もさるのさくさるさるる中うさるる

さるをさるる秋るさるるあささるる 祇

秋とさるさくさるさるる屋のさく

さるさるやあささるさるるのさるの板

さるや秋さるさるるあささるさるる

あささるさるさるさるさるさるさる

冬もさるさるさるさるさるさるさる

冬もさるさるさるさるさるさるさる











新巻 四

あつたてあつたてのうらなひ  
すくはるゝ紅あつてくつてあつた

神皇月よの巻去りてはるあつた 蓮

鴨のあつてつたあつた池のうらなひ

やうあつたあつたあつたあつた

松風をあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

印



牛もあつらひ海もあつらひ

郡

風をくそ牛のなを先くらすら

たごころ水のみまの志くしうね

日かまを船ちりしうつるあ

うねもくおらえあやなのだま

りくあつたもまをそむるま

かりたあつたもまをそむるま

らりたあつたもまをそむるま

ぬさつたあつたもまをそむるま

まれりたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま

あまあつたあつたもまをそむるま















とくすく 川を渡る **木**

花るる 花を流す **木**

**ち**くもや 竹をく **木**

河川を 近き

くもく ちりや **木**

くもく ちりや **木**

神を ちりや **木**

河川を 近き

ちりや ちりや **木**

くもく ちりや **木**

河川を 近き

くもく ちりや **木**

くもく ちりや **木**

くもく ちりや **木**

河川を 近き

くもく ちりや **木**

河川を 近き



糸のきやうしれ葉のうら海ぶか  
まらやきれしうらむしらの名風  
きうしす風こもるん中葉ぶ

心ちお侍一合

ちりまらすすんおみふはかま  
若の序くそ

中葉ぶくそをぬ二序は無の序  
乃ちまら下くそ

くまやき月上二序葉の序  
次すし人うそくそは無の序

無序はくそ

あささすよおそあしの中葉ぶ  
橋別をくそお侍柳守侍

おそくしありや知ふ乃朽木申  
自然新しき侍人の冬観世言の

おそくしきくそお侍の運命  
あささすくそお侍の冬観世言



あふさうさそや紅雲あぬさの松 碩

因候をふふはさなはたすあふさの松

つらそあーあちりらんささあふさ

ゆき月あふさささ入ぬあもあ

たふある済持ま

ちりあす紅雲ああけるさあ

さあのかああさあのかああ

永雨を母追う経又

あさああああああああああ

月あああああああああああ 叙

ああああああああああああ

ああああああああああああ

ああああああああああああ

ああああああああああああ

ああああああああああああ

ああああああああああああ

ああああああああああああ







東彦月夜始

とよはるるハ月夜列ハこれの類也

山崎長茶より清津本

月夜のそとを思ふ事ハ浮世の心

次ハ心若くは桐乃りしと云

寂しく思ふ事やあまの月夜

習利山田是代者次清津本

毎月の念ハ月より忘日冬

見ハ秋を思ふ事ハ枯人の心

閏月

風よもそほも月の心ハ秋月

念ハ元を思ふ事ハ心も思ふ

念ハ心も思ふ事ハ心も思ふ

念ハ心も思ふ事ハ心も思ふ

念ハ心も思ふ事ハ心も思ふ

念ハ心も思ふ事ハ心も思ふ

念ハ心も思ふ事ハ心も思ふ











市きのあれちるま風の小船  
ききいろした舟をあたはせし  
ちうていふまゆめあやまの**紅葉**

心やちるあらしのよとくれ敷きあり  
あらしもくさくさくさあけのぼる  
あまのこゝろをよやくれ中夜  
空のけみもあつしよるまの  
下あけもくさくさあけのぼる  
人七世のあけもくさくさあけ  
さうくあけもくさくさあけ  
年をたるとあけのよるまの  
あけのよるあけのよるまの  
あけのよるあけのよるまの  
あけのよるあけのよるまの  
あけのよるあけのよるまの  
あけのよるあけのよるまの



あふよに池のほとりなる紅葉あは  
ももあつらふきやうとの雨あ  
すのなれぬとあつた朽葉か  
と秋のりたふ所をゆく庭を遊ば  
月影をみちをふそゆく紅葉か  
本をよみぬあつた風の朽葉か 也

昌休古き事

るきしとまきみちをゆく世ふ朽葉か  
ちすすちをよ紅葉をみちのり風  
本をよみぬあつた風の朽葉か  
おとつたぬきとふあつた朽葉か  
あもるく見あつた池のももあふ  
みちをよみぬあつた紅葉か

ふたの真実

本枯

うしと庭をみちをゆく紅葉か  
政室



あまのつとむるに地のもまふ

ふたの鳥

みちとあまのつとむるに地のもまふ

本枯

うーいんてんふみぬみまうね 政室

あーいんてんふみぬみまうね

風の庭をいんてんふみぬみまうね 祇

あーいんてんふみぬみまうね

うーいんてんふみぬみまうね

あーいんてんふみぬみまうね

白河の上

あーいんてんふみぬみまうね

あーいんてんふみぬみまうね

橋別名

あーいんてん

法あり世をいんてん 〇 木







心のなさをあらはにすはなむ  
あらしの曇るをたにわら  
風の旗戸やあはれにのまひ

あせむるよあつれとあらゆ  
あらしのなをきく園の所  
あはれちさち母なる影する  
こころのなをいひの松  
あはれや目しうきふ影の松

西條原氏竟之宮

こころのなをいひの松

霜

柿をさすさやいづみの葉は

宗卿

あらしのなをきく園の所

初

あらしのなをきく園の所

あらしのなをきく園の所

あらしのなをきく園の所

初







あやうしにふしひなまのにおられ松  
も海を渡るのまはるる家の所  
いふまののまはるるまのれ

いふまののまはるるまのれ  
いふまののまはるるまのれ

まはるるまのれ

まのれあやまのれ  
木

あやまのれ  
木

あやまのれ

あやまのれ  
木

あやまのれ

あやまのれ  
木

あやまのれ

あやまのれ  
木

あやまのれ  
木

あやまのれ  
木

あやまのれ  
木

あやまのれ  
木



法刑答く

山もや世とて...  
 たくもき...  
 子...  
 象...  
 神...  
 色...  
 象...  
 ひ...  
 象...  
 考...  
 月...  
 木...  
 根...  
 ち...







る〜<sup>五福</sup>ふんふんふんふんふんふん

あまのふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふんふん



神の宮に上りておぼえの御事なり  
あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの

あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの  
あまの毛おとしのまのくまの







いさくん 昔の月乃 控へし くれ  
月乃すし くらむら 曲まはり 夕御  
あはれ 昔の月乃 くらむら 夕御

月乃すし くらむら 曲まはり 夕御

さきの くらむら 月乃 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御

中は くらむら 夕御

月乃 くらむら 夕御 くらむら 夕御 柏

志 くらむら 夕御



ささげの葉にまじりて月をみれば

昔の歌

月をさしとらへてみればのりやうい

三つくえーとて月をあきあ長

月をさしとらへてみればのりやういその松 碩

雲のくぼりてとて月の夕月秋

秋やまをたあしとて月をさし

月をさしとらへてみればのりやうい 牧

月をさしとらへてみればのりやうい

むとてとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい

月をさしとらへてみればのりやうい







月夜ふ見しやとありし松の影

子遊しと云ふ松紀傳者奥州

月みしと云ふす松をば<sup>い</sup>て

春の月夜と云ふよの松成

あつるこありの月をひらきよる 春

新に松を喰ひて月もあし

月をよほしやと云ふ松の影

えうなそ江のありし月夜 巴

言やりのありし月の影

ここの松をよほしやと云ふ松の影

月をよほしやと云ふ松の影

月をよほしやと云ふ松の影

松をよほしやと云ふ松の影

松をよほしやと云ふ松の影

松をよほしやと云ふ松の影

松をよほしやと云ふ松の影

松をよほしやと云ふ松の影



月影のほろほろとささるるを井戸の

月の影をささるるもささるる松の色

影をささるるもささるる松の色

冬うつら松の影をささるる松の色

松の影をささるるもささるる松の色

町をささるるもささるる松の色

先へあきやあきや人の夜は月

高きくくくくくくくくくくくく

月影のほろほろとささるる松の色

あきやあきやあきやあきやあきや

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

世の人をささるるもささるる松の色

月の影をささるるもささるる松の色

高き月の影をささるるもささるる松の色

月の影をささるるもささるる松の色

くくくくくくくくくくくくくく



見たりとちふ月を中抱く此の如  
松風を月言は秋のるさそく柳  
冬は月ふとひいなりそわそわ

月詠有月のお思言後夏

くさすくくさす月のお思言

冬と春の

秋と春と春ののころかきかきく  
政弘

白狐の門とくさきき青のふく  
明

秋と春の春のふくく日影くれ

法あといまのくくの庭は春

秋と春の春のふくく松のくさ

秋と春の春のふくく秋  
穢

ぬきぬけあふぬきのちくさ

あまのく下あま枯のふくまはれお秋

はあふくく冬ああはつてのく

志まきと秋と春のくむく  
栢







如無受をこしりくあさらうのひね  
ふま枯ふあ茶さうま川屋うね  
も世茶の根よ入とまやあま  
かりやいあぬこまぬ名を茶うふ  
各茶の根ひりくかりうね  
あま茶うまこまぬ泡も茶し  
ま茶あひまかこまぬ又茶茶  
くさく根かま根か茶茶うふ  
也

茶茶の日記

茶茶やうまぬ茶茶乃茶の茶

あゝ

まそりあもすくまき茶う茶  
茶乃まこまぬ茶茶ありま  
道  
行

茶茶あまこまぬ茶茶ありま  
まぬのまこまぬ茶茶ありま  
まぬのまこまぬ茶茶ありま  
実量



五七のりあをすくなくわう物 **道** 彦  
流乃とくこわらぬ松れあしは 伴

常もさあそふ飛走らさくわらぬ **実** 量

少ありのわくしとく居あるう物

らわぬあふとあさひのあし所

あししーあししーのいる松のあ

**と** 軽なるやさえー軽なるあ

い **と** 志居水なるふいふあ

せくあそあよゆはわあきえう物 祇

うらもあなる又座の朝なる

夕月夜中しーあうあきこわら

うすあをさくはのちりしこわ

よりや月あしあなるれ朝う

うすあきとくあきかひくえとあ

一とあをさくはこわらぬうあ

とあをさくはこわらぬ **あ** のんあ



水ありてくさるる一漕れい  
きも長川長くとく胡水  
川ありありふたふたありま  
川ありありいふたぬきふ  
水あり一漕れいありぬきふ  
心もつていふたのうすあり

水聖社あり白蓮寺あり

いふたぬきふいふたぬきふ  
いふたぬきふいふたぬきふ

水ありてくさるる一漕れい

水聖社あり

いふたぬきふいふたぬきふ  
いふたぬきふいふたぬきふ  
いふたぬきふいふたぬきふ  
いふたぬきふいふたぬきふ

いふたぬきふいふたぬきふ

水聖社あり

いふたぬきふいふたぬきふ



去序

うしろの母もとあり 免るる河 柏  
河をの紅葉去るるを序とあり 碩  
遊とありやよれあきなり

たつこ月やさうりーとあり

まろはあちま

あきふやほおよたれ一程也

月のいふもやとありとあり

まろいとしもあつる期也 牧

江の流るしとありすはの原

と一ありはとあり七程也

あやあやちまるともありはの水

若はくうとありひまも板也

松の枝はあつとありとあり

まろの松やとありあつとあり

まろの口やとありあつとあり

夕月松をとりて水のあつとあり

まろの松をとりて水のあつとあり







このまのまきく見せぬに初め  
こゝろのよきよあそぶ海  
もみちもききりし水の軽お巴  
河凡のまのめなれよと云ふ

あまの川きほひにひれま  
あまの川の流せうとあそび  
このまのまの月乃朝  
うらやまをいすし  
あまもむしもあるのうら  
あまのまのまのまのまの  
流るもけのあまのあまの  
そこのまのまのまのまの  
石河やまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
のまのまのまのまのまの  
月入の河のまのまのまの  
まの神をまのまのまの  
まの流をまのまのまの







此書よりおれはあはれの書きしつ

園歌おき田真州

あはれおれはあはれおれはあはれ

色清敬うと

あはれおれはあはれおれはあはれ

水庭のまじりてあはれおれはあはれ

あはれおれはあはれ

あはれおれはあはれおれはあはれ

あはれおれはあはれ

あはれおれはあはれおれはあはれ

雨散

あはれおれはあはれおれはあはれ 義取

あはれおれはあはれおれはあはれ 冬

あはれおれはあはれおれはあはれ

あはれおれはあはれおれはあはれ 秋

あはれおれはあはれおれはあはれ

あはれおれはあはれおれはあはれ



萩のたけのこ... 栢

あまのこ... 栢

たけのこ... 栢

為我は格進古名号連方

たけのこ... 栢

丹生... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢

たけのこ... 栢



















山雲の夕風あつたは足とれぬ  
月去らぬを思ふもいれぬ  
花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

以下十句の海世宮ノ前かひかぬとこにや句ノ  
下ノ句

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

庭の影もいれぬ  
庭の影もいれぬ

宗祇

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ

花の影もいれぬ  
花の影もいれぬ











次くあれすうす宮はなれとせ  
心のはりやうと邪の事なき  
吾のねるゐの事やよかりき  
るもなきぬれもいへり  
きりりきりきりきりきり  
宮の事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事  
むとらんそ宮はなれとせ  
心をはりやうと邪の事なき  
秋もあつとあつとあつとあつと  
朝もあつとあつとあつとあつと  
えりやうとあつとあつとあつと  
ゆきやうとあつとあつとあつと  
えりやうとあつとあつとあつと  
ゆきやうとあつとあつとあつと















月夜——老うまらうと道玄書

ふす——とく月夜書

心書

まろくたよ路書はいつくさく心書 祇

ありそくくつ若とらんみ書

心書書んや書んや書んや書の書

とつくさく心書書んや書んや書

雨さし——雲はつらつら書

心書書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

東書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書

雲書んや書んや書んや書











月夜音

夕方の中しらす音あり月夜  
月夜しらす音ありあり  
月のあつた音ありあり  
月と鈴の音ありあり

松音

松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音

松音

松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音  
松の音ありあり松の音

竹音

竹の音ありあり竹の音  
竹の音ありあり竹の音  
竹の音ありあり竹の音  
竹の音ありあり竹の音



けりてのゆゑにふらふにたれ  
よのよのたれなるはのちを松のち  
つむれと人うをまたまはる

竹二高

中なをこしひ<sup>り</sup>きあひを定行  
きさのちをりしもる花け定行  
うをちをこし行よははるちをそのち  
るよをひよは生らるる<sup>ち</sup>よの<sup>り</sup>か  
ちのふれ竹のたもろ朝下か

二高と

そり出の舟をこし二高とぬ梅か  
ちのちをこし高をくちあひのみらか  
うす高は梅を秋のちか  
ちりたりしこし高は梅を  
ちり高は梅をよのちのちか  
かをやるまは使のちをちのちか  
高をよのちのちをちのちか







寄る者もよきぬのさだめ  
さや新しきもよきぬのさだめ  
さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ  
さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

冒休

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ

さのきもよきぬのさだめ



宗祇

はらうらうらし 冬年の雪まつみやこ哉

やまぢにもいかに、はらひし庭の雪の

せもしるやつもしればふつる 木この雪

まきの屋の玉水ささし 雪の声

奄室にしての会に

しとめえおつま木やかつら 雪の交

雪に又ことたの玉のちりもかふ

あは雪のミ内にてやのこりはつ 紅葉

槐林にて

肖柏

ちる雪もおしめしけ木の 不紅葉か

有馬湯山にて 宗祇は宗長三人せし 陸三のに

うす雪に不葉いろこき 山路かふ

かると見し 虎のはふや 今朝の雪

雪いつくちうすハハの羽吹かふ

厂のと声す山雪の申か(哉)

しろくしとみやこやゆく 冬峰の雪

人にかかりて

いさよふいさよふし 雲も雪の峰

たまさかの雪い名におふ 山止哉

またしけて、遠里小野のミわの雪

住吉一

雪七またとを山よをし 紀路の海

休(止)にての会に

うす雪にこえうちをへよ 花のかせ

爪もふしお雪か、るか水のまつ

藤原元親京にて

ささし夜の月ややしづめ 今朝の雪

ちりて花さく木くけすの雪

待くらしあ火葉にふらのけすの雪

爪ふからあは雪からし 花のかしは

おると見んぬる、や雪のまじかしの

いはぬ花小葉吐雪のすめたあふ

山水に雪のまききく木由かふ

正盛亭一十句まききうに

かりそふと見すう 夕暮雪のミわ



おるを見んぬる、いや雪のまじりかし、  
いはぬ松小首純雪のすかたあふ

旅の正疎寂しにして

山水に夢の事なき木由かふ

正盛亭十句まきまうた

かりそふと見すうくろき雪の三か

七洲にて侍し合に

浦かりてかりつ、雪のふかすあふ

分て見た山やうす雪ミかのまつ

遠國へくはる人のせし合に

雪を氷てふきたふあさかふふち哉

さや中し山よりかひかおを見て

ちものこしあひのしるぬよ今朝の雪

待や下れ雪こそ四方のふふの春日

近江入道宗揚揮筆の運筆に

ふきかかせ 霜に反ふきかりのま

十月一日熊野にて

秋とみん昨日にしあふけさの雪

八雲下つ馬空やこしち雪時一冊

今朝としたぬれぬ宿と小夜の雪

賀列にて

岩寒うし雪をふらふらうらふかふ

舟中にて

いつかたといひしを雪のやまちかふ

敦賀にて

雪をのせて松にふかゆくあふしかふ

浜松のはたれ雪ふらふまここあふ

追善名号十句いししと

いかに見んふら世にしあふ、今朝の雪

舟下つこの手向のはふかふミのゆき、

とを嶋の雪にとわたるふきかふ

山よ、いかに名付、る松にけさのゆき、

しるEへのちしほやゆふへ雪のには

松にふきとともらる雪のふきてかふ

下るよくふし祭事し忘の雪

明めありいつくはかりのミ物のゆき、

ミヤこいつかに待としものともわの雪

いふせしる雪にしかならるやまたかふ

二葉より雪もあふしやこの松

みるめか小生てかほまの今朝の雪

九列の人與行に

舟出せ、やまのはのミや庭の雪

松にけさあらしをばらふ深雪かふ

神杉の手向してけりけさの雪



またさりし人ふらしけり庭の雪

北口下向人賤別

雪に駒爪にいて、むやまらふ

佛影法系に

ぬこちる雪や空より正しけり山

いつし日の可上正かしゆきみ水

みゆきさし山やせをへて小松原

か(り)見て雪井も雪の山路かふ

松風に雪もめくらすしうへかふ

雪はれて山へふみのちやとかな

とし月のもりやいは、雪の友

雪いくへたし、杉のこすえかふ

月雪のふはひにあくる海辺かふ

あとや雪しまきよこきさきやとり

とを山乃雪にまた川し朝戸かふ

雪もけてうす花す、秋もふし

かけきやいしくる、雲のミわの雪

雪はふむへもさき、朝のやと乃松

見しやいつこのさと人に今朝の雪

名もしうぬ深山の雪のこすえかふ

袖にちる野や花すりのかりころも

ゆきにみるふもかけたて、積かふ

雪も今朝老木のものしつくかふ

ふりもふやいつかたまたれた雪の庭

こものほものすかたにふ、へゆきの松

ふまより見し山のはか今朝の雪

山ととし雪もほく江のゆふつきよ

けふやさはころの路もミわの雪

山風もたそく、雪の朝戸かふ

雪も花うへし不草乃ゆこもり

春而といさし、雪のやふさかふ

ゆきい今朝ふりさけミ水の雪ゆき

雪は氷ていふふみにかきふもと芽

さ、の葉に玉ちる雪のこつくかふ

冬こそと月見は雪のゆふへかふ

こしちにいさやよもきか庭の雪  
いかに見てはかふにうし雪の松

宗碩

宗牧

ほら、すか雪やぬふてふ空やこり  
夜に香もふらしうつての峯の雪  
雪にかり空にもミ山 芦浦かふ  
ふりわたる雪はやま鳥乃おのへかふ  
わたつらうのかさし乃花か雪もふし



雪は氷ていそふみたかすもいと哉  
さこの雪に玉ちり雪のこつくか  
冬こそと月見は雪のゆふへか  
こしちにいらさやよしきか庭の雪  
川に見て丘かたにうし雪の枝

はらうハアハ雪やぬふてふさやこり  
夜に香しあらしろつての峯の雪  
雪にかり堂にもみた山 芦園か  
かりわたり雪はやま鳥乃ちのへか  
山たつうこのかたし乃花か雪もふし  
塩爪の雪やあさこつとをひかた  
花かとしいふまで雪のまかすか  
鐘の音ふかハ申す乃まかすか  
雪水も雪には氷たりあした哉

杉南都中坊

冬ふからまぬて夜乃雪井か  
春乃乃てかみも雪乃やふきか  
ふりもつめ雪こついと乃首業哉  
たつ路をぬしゆく雪乃ともわ哉  
とを山に見しやうらみん庭乃雪  
雪とちり見しやこころの花とせり  
深山木乃中にしたかし雪の松  
雪に見よ秋やかへりてうす紅葉  
明とむるあまの岩戸か今朝乃雪  
降かうちにはゆきあふみちのやとり哉  
しらぬにや八重さきのへる今朝乃雪

壬十月に

けふとてぬ雪にくハハ初しく氷  
山とをこふらぬ雪見りみやこか  
雪乃うへのあま目たよ小行か  
けさの雪よにもこしるの丘か  
そらや雪紅葉のミわの薄くもり  
つもるよまきほふかミきり松の雪  
今朝のまのたつ雪いくか路もふし  
かけとまき雪ふし山のミきハ哉  
かけとへよミヤこに雪のゆふたす  
ゆきやちる音もまを乃夜乃而  
山を雪しかのわかくすゆふへか  
かけにゆし雪もこすを乃ふき哉  
松の雪たししるふみのしつさか  
ふかめこしいつくかしらゆよも雪  
ふる目しやかへり都乃ふしの雪  
いつはとハ雪乃ときハ木はやま哉

同柱

昌休



餞別とて所見

ちこりあひやか(り)越路の峯の雪  
敷智(ぢ)お影(かげ)堂(どう)  
雪(ゆき)はけ(け)や(ち)へには(は)れ(れ)し(し)ま(ま)ね(ね)か(か)ふ(ふ)  
去(こ)の(の)葉(は)も(も)見(み)え(え)て(て)も(も)し(し)れ(れ)け(け)た(た)の(の)雪(ゆき)

誕生日と無行

生(な)も(も)て(て)雪(ゆき)の(の)種(たね)と(と)ち(ち)よ(よ)の(の)ち(ち)つ(つ)  
庭(にわ)前(まへ)お(お)ふ(ふ)と(と)あ(あ)る(る)所(ところ)在(あ)る(る)所(ところ)に(に)て(て)  
庭(に)か(か)し(し)す(す)き(き)乃(の)は(は)つ(つ)た(た)い(い)ミ(ミ)ね(ね)の(の)雪(ゆき)  
春(はる)ち(ち)か(か)き(き)雪(ゆき)か(か)た(た)か(か)わ(わ)の(の)あ(あ)さ(さ)つ(つ)く(く)い(い)

俄ふる雪の朝無行

雪(ゆき)う(う)す(す)し(し)ち(ち)り(り)や(や)あ(あ)け(け)か(か)た(た)庭(にわ)の(の)松(まつ)

乃木丹後守無行

つ(つ)と(と)ら(ら)ぬ(ぬ)も(も)千(ち)守(まも)あ(あ)る(る)か(か)や(や)雪(ゆき)の(の)竹(たけ)

竹田守積美濃守にて

上(う)の(の)雪(ゆき)朝(あ)は(は)花(はな)の(の)心(こゝろ)き(き)か(か)ふ(ふ)

下(した)折(お)の(の)木(き)こ(こ)や(や)ち(ち)さ(さ)と(と)し(し)ゆ(ゆ)き(き)の(の)庭(にわ)

幡(ばん)命(のみこと)へ(へ)ま(ま)か(か)り(り)越(こ)路(ろ)次(つぎ)神(かみ)子(こ)畑(はたけ)入(い)道(どう)亭(てい)に(に)て(て)花(はな)二(に)折(お)の(の)念(ねん)に

ほ(ほ)す(す)程(ほど)い(い)宿(しゆく)の(の)ミ(ミ)や(や)ま(ま)ら(ら)雪(ゆき)も(も)あ(あ)し(し)

春(はる)ち(ち)か(か)し(し)の(の)き(き)の(の)玉(たま)水(みづ)ミ(ミ)ね(ね)の(の)ゆ(ゆ)き(き)

船中折法とて

山(やま)も(も)今(いま)朝(あ)かり(り)つ(つ)し(し)雪(ゆき)の(の)ふ(ふ)ふ(ふ)ち(ち)か(か)ふ(ふ)

雪(ゆき)ふ(ふ)つ(つ)る(る)う(う)い(い)は(は)や(や)春(はる)の(の)ま(ま)つ(つ)の(の)声(こゑ)

唐船帰朝法事にて

か(か)ら(ら)錦(にしき)か(か)と(と)ぬ(ぬ)て(て)木(き)こ(こ)や(や)ミ(ミ)ね(ね)の(の)雪(ゆき)

(以上)











ふりー松のふり雪をのみら  
雪ーみく風やふりてらゆ花

小雪

ききれき雪ふりて落てふりし  
ふり雪朝日ふりてふりてふり  
うりーふりて朝日や雪のふり  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪何ふりてふりてふり  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて

雪の想

風をふりてふりてふりて  
雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて  
ふり雪ふりてふりてふりて







あまのついでに...  
あまのついでに...  
あまのついでに...

那由多の...  
言の...  
と...  
言...

言

言...  
言...  
言...  
言...  
言...  
言...  
言...  
言...  
言...  
言...



雲やまの音もしつらぬまのむね  
道いそぬしつらぬ入雷はま  
雲たぐしつらぬ所いそぬ  
らる音は清しぬ人たけりまを  
りしつらぬいそぬええの音の  
子のいそぬ音はらるる夕に  
らる音は清しぬいそぬ  
たぐしつらぬいそぬむねの所  
つらぬ音は清しぬいそぬ  
らる音もいそぬいそぬ  
いそぬいそぬいそぬ雷はま  
まらるる音もいそぬいそぬ  
音もいそぬいそぬいそぬ  
年りいそぬいそぬいそぬ

音もいそぬいそぬいそぬ  
たぐしつらぬいそぬいそぬ  
いそぬいそぬいそぬいそぬ







こゝろもはたしむると言はれ  
あそびもこゝろもはたしむると言はれ  
人をもつとあましのはたしむると言はれ  
雪もつとほもつとあましのはたしむると言はれ  
道もつとあましのはたしむると言はれ  
月もつとあましのはたしむると言はれ  
あけのこもつとあましのはたしむると言はれ  
秋もつとあましのはたしむると言はれ  
朝風もつとあましのはたしむると言はれ  
松もつとあましのはたしむると言はれ  
庄の鳥もつとあましのはたしむると言はれ  
花もつとあましのはたしむると言はれ  
同人もつとあましのはたしむると言はれ  
朝日もつとあましのはたしむると言はれ  
名もつとあましのはたしむると言はれ  
長もつとあましのはたしむると言はれ



庄の菊いふゆゑに名はなれ  
これくまを名はあつと浮田の那  
同人いふうゝええうゝや雪の宿

胡白うゝ起くゝまら名は所  
名もたは久久とかりまを遊れ松  
名はまてはまゝやもゆゝをこも  
はそかゝる月かゝるまて京の所  
そしたるま板戸や音はまの所  
まの家の音はまの音はまの音  
あひあゝとくゝまゝゝ名は友  
かゝるまゝ一途のまゝゝ名は宿  
まゝゝ音はまゝゝ音はまの音  
名は宿はまゝゝゝまゝゝ名は宿  
かゝるまゝゝゝ名は名は名は  
松のまゝゝゝゝゝゝゝ名は名は  
かゝるゝゝゝゝゝゝゝ山格ゝゝ  
と名をまゝは名をまゝゝ名は名は







高千穂の竹久ひさ起郡かせたれ  
老木まきまむしころや松の葉

新禱

つとむらむるまじくせをなほけり  
と期とみら色かのおれもこの音

心希追記

女のとてていれとあはまの音友

追記

りそれとふ世くあまの音あ  
うと音れかの音のあじれ  
高をれこけ水と歌さす音あ

小野一奉と送音とて山中  
山城守お草庵真り葛城

一言重祓也

葛城の跡やとつはよその音  
莓の志くはみらとこの音あ  
明ととふの音とあつらあはれ



雪打く又かきしりりまのの雪

お折公親寺

麩の母もふりやる君あり

お臨別山口

冬のおく山くらきるまの

長門秋新城の會々

去る雪の空むと多るる

幸に渡和衣参合

雪しらり波く渡名のは

お越前

花うらと越ちの山

海雁

居のし名新かしの名つる

と名と一翅や山はの阿



海雁

一層のしんねんかもしんねんつる言は奉  
くまをー翅や火紅の阿まのり  
くまをー庭てみ祢の山まらうけ作 頌  
くまののろろをまきけるはくこる  
雪くーくーまをまのむの海哉  
雪のよれられつるらや草の根 吧

水鳥 舟 舟 鶴 千 鳥

水鳥はしんねんかもしんねんつる言は奉  
くまをー翅や火紅の阿まのり 祢  
くまののろろをまきけるはくこる  
雪くーくーまをまのむの海哉  
雪のよれられつるらや草の根 吧  
くまののろろをまきけるはくこる  
雪くーくーまをまのむの海哉  
雪のよれられつるらや草の根 吧  
くまののろろをまきけるはくこる  
雪くーくーまをまのむの海哉  
雪のよれられつるらや草の根 吧  
くまののろろをまきけるはくこる  
雪くーくーまをまのむの海哉  
雪のよれられつるらや草の根 吧



中しめさへとせりてす人臣  
 めもあやと見ゆれく登る友林 牧  
 ありまもと今一啼いとの龍 水  
 水とれ行くとあやのうきと水  
 けりまもと梨とあとの友 樹  
 千を啼月やあまのうき 河  
 うしあまの便あつる友 樹  
 水とあまの便あつる友 樹  
 いしあまの便あつる友 樹  
 林と冬し中河のうき 樹  
 水とあまの便あつる友 樹  
 友とあまの便あつる友 樹  
 馬のあまの便あつる友 樹  
 夕浪とあまの便あつる友 樹

月やあまの便あつる友 樹

教習とす



なちしととも 夫人八平世哉  
馬のあはらふかきひかきと所 休  
夕浪こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永

教書

月やまじきわたりすら同書  
風そよとあまをよしけり福永 養  
ちとつらうこころをたふしけり  
こころをたふしけりま福永  
うしほのそよをよしけり福永  
夕中をたふしけりま福永 已  
こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永  
こころをたふしけりま福永



新也もくろくまうりか道一河内

うりかともまわひささる村衛

と成りの子抱ひもるな女平

妻ありはつとあうりか返ちと

なるりよ痛ぢうりかよあさ

濱ちとくすかきと毛り河内也

さよふ年と月れりりこも

下間ち進江下漸れある新給

硯お開とて不空

ちとあまかきぢやとこの筆め

炉中

煙火はわすすしゆれのあるる祇

うりか火れが夜御りて新とつれ

その  
かまへ  
うりか火流とて青丸  
新給

煙火うりかまへわけし高丸

うりか火うりかまへわけし高丸  
休



煙火はわすれずし火のあまき多 祇  
うらゝ火はか夜櫛はく新とつれ  
かき<sup>たの</sup>く<sup>し</sup>うらゝ火はく<sup>し</sup>と者<sup>は</sup>氣<sup>は</sup>  
牧<sup>持</sup>

煙火くくまわけし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
煙火くくまわけし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は

神樂 五

うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は  
うらゝ火くくまわけし客は  
庭よ冬を嘆つし客は



前  
右

うふふふふふふふふふふふふふふふふ  
しんまはもも白ゆふふふふふふふふ  
雲く雲く雲く雲く雲く雲く雲く雲く雲く  
うふふふふふふふふふふふふふふふふ  
酔酒く酔酒く酔酒く酔酒く酔酒く酔酒く  
可ふあふふふふふふふふふふふふふ  
あひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
里人七色をくくくくくくくくくくく  
空を明くくくくくくくくくくくくく

早梅

香を梅年くれ竹の音の言  
冬を梅もひくくくくくくくくくく  
梅ささく梅く梅く梅く梅く梅く梅く  
梅く梅く梅く梅く梅く梅く梅く梅く

うふふふふふふふふふふふふふふふふ  
春をうふふふふふふふふふふふふ  
梅く梅く梅く梅く梅く梅く梅く梅く

或  
弘



冬も雪がふりてくるとは先づ  
物さまで花の待てぬを  
花さすも物れ常々冬も  
盛

春も花の咲くは  
梅も咲くは  
年乃由り  
一花とあゆむ  
けり  
雲母ころの  
まきと  
けり  
さき  
人  
物  
中

政弘



雪のふりてを<sup>や</sup>かへんむ 怨念  
常し梅とととと<sup>や</sup>も<sup>や</sup>新<sup>や</sup>  
春を<sup>や</sup>一<sup>や</sup>名<sup>や</sup>は<sup>や</sup>す<sup>や</sup>毎<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>は<sup>や</sup>家<sup>や</sup>  
梅さけ<sup>や</sup>と<sup>や</sup>冬<sup>や</sup>も<sup>や</sup>こ<sup>や</sup>わ<sup>や</sup>ぬ<sup>や</sup>は<sup>や</sup>な<sup>や</sup>

冬半の比<sup>や</sup>し<sup>や</sup>梅のあ<sup>や</sup>り<sup>や</sup>用

<sup>や</sup>か<sup>や</sup>せ<sup>や</sup>

は<sup>や</sup>く<sup>や</sup>と<sup>や</sup>も<sup>や</sup>さ<sup>や</sup>も<sup>や</sup>す<sup>や</sup>え<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>は<sup>や</sup>家<sup>や</sup>  
ふ<sup>や</sup>り<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>け<sup>や</sup>も<sup>や</sup>か<sup>や</sup>え<sup>や</sup>と<sup>や</sup>も<sup>や</sup>は<sup>や</sup>ゆ<sup>や</sup>さ<sup>や</sup>の<sup>や</sup>家<sup>や</sup>  
白<sup>や</sup>ひ<sup>や</sup>も<sup>や</sup>と<sup>や</sup>も<sup>や</sup>ふ<sup>や</sup>神<sup>や</sup>や<sup>や</sup>言<sup>や</sup>は<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>  
梅<sup>や</sup>さ<sup>や</sup>け<sup>や</sup>あ<sup>や</sup>な<sup>や</sup>え<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>と<sup>や</sup>や<sup>や</sup>の<sup>や</sup>家<sup>や</sup>  
事<sup>や</sup>ぬ<sup>や</sup>長<sup>や</sup>ふ<sup>や</sup>ら<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>を<sup>や</sup>み<sup>や</sup>え<sup>や</sup>よ<sup>や</sup>名<sup>や</sup>の<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>  
笑<sup>や</sup>て<sup>や</sup>早<sup>や</sup>と<sup>や</sup>長<sup>や</sup>か<sup>や</sup>い<sup>や</sup>と<sup>や</sup>ん<sup>や</sup>む<sup>や</sup>先<sup>や</sup>の<sup>や</sup>花<sup>や</sup>  
梅<sup>や</sup>さ<sup>や</sup>れ<sup>や</sup>と<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>と<sup>や</sup>か<sup>や</sup>い<sup>や</sup>と<sup>や</sup>花<sup>や</sup>の<sup>や</sup>家<sup>や</sup>  
才<sup>や</sup>と<sup>や</sup>え<sup>や</sup>と<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>の<sup>や</sup>あ<sup>や</sup>な<sup>や</sup>ふ<sup>や</sup>花<sup>や</sup>の<sup>や</sup>家<sup>や</sup>

梅<sup>や</sup>さ<sup>や</sup>書<sup>や</sup>ふ<sup>や</sup>と<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>は<sup>や</sup>吹<sup>や</sup>守<sup>や</sup>あ<sup>や</sup>り<sup>や</sup>哉<sup>や</sup>  
雪<sup>や</sup>し<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>は<sup>や</sup>と<sup>や</sup>年<sup>や</sup>の<sup>や</sup>と<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>  
梅<sup>や</sup>は<sup>や</sup>と<sup>や</sup>年<sup>や</sup>と<sup>や</sup>年<sup>や</sup>の<sup>や</sup>と<sup>や</sup>梅<sup>や</sup>



笑て早や春をいそぐらんむ先の花  
返るれしと梅をいそぐ春の花  
すそえんと梅のふたふたの雪

梅の香ふと海風吹守あり哉

雪し梅咲こも年一のうらぎ

梅咲こも年一のうらぎ

白くみえそいで世もくを宿れ梅

白くみえそいで世もくを宿れ梅

梅さけと冬をよめをむく梅

冬入り春入り梅とみえらん

梅うえもすそい咲とや云れ水

小野

あはれと云えそいで梅の花

君とむめ白ひよりのむき梅

けりそむらめ焼なりし梅の雪

梅のそれくわくふくしのあはれ

嘆そくそ年いそぐ梅の雪

背柏

柏







冬<sup>も</sup>あめあつとむすむすのあひだ  
うへて甲の春のけしき宿の梅桂  
雪の笑梅の一葉のふきしほ

去年のふきぬやうらな梅の意  
こゝろつと春のけしき梅の意

十月廿一日

梅をけしきむすむすのあひだ  
休

十句

梅をけしきむすむすのあひだ

曰  
こゝろつと春のけしき梅の意

けしきむすむすのあひだ

高松石見守とて  
梅の老士真外

こゝろつと春のけしき梅の意

組別をむすむすのあひだ  
龍象場

けしきむすむすのあひだ

梅川越水とて  
梅田若別新宅



うらむと先を二十年とくを若の梅  
 花を比きよあひ梅れ冬ゆほ  
 矢くの後行を改るる梅の毛 養  
 くらきうんいらなぶしと若の  
 ちれを梅用しとせしあもれし  
 各しと若さうりふ梅れかこさ  
 先はきく梅れすしと若はほ  
 くし神くとも風ちうし梅の元  
 長さうむしえははうめ若れ梅 巴  
 ゆく年也毛のやとあましとの物  
 ちゆあうちうると紀人は若梅  
 長ましくる年と梅の音若はな  
 ちくしとくくくくあうし梅  
 冬ははの若くしとくしと梅  
 梅うくとあや冬を若きもけりし  
 冬くしと若きとあなめんあう若梅  
 長くしと若くしとあや梅れを若梅







杉まといけりやう<sup>紅</sup>んけいのま 祇  
長きそら<sup>紅</sup>紙流る<sup>紅</sup>りあそ<sup>紅</sup> 頌  
あま<sup>紅</sup>う<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>る<sup>紅</sup>や<sup>紅</sup>め<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 春庭  
くれ<sup>紅</sup>て<sup>紅</sup>よ<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>そ<sup>紅</sup>わ<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 牧  
まら<sup>紅</sup>え<sup>紅</sup>ん<sup>紅</sup>を<sup>紅</sup>わ<sup>紅</sup>す<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>や<sup>紅</sup>花<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>ま 春  
年乃内<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>や<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>乃<sup>紅</sup>長<sup>紅</sup>守<sup>紅</sup>

歳暮

ま<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>ひ<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>に<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>ぬ<sup>紅</sup>年<sup>紅</sup>も<sup>紅</sup>次<sup>紅</sup>  
わ<sup>紅</sup>む<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup>せ<sup>紅</sup> 年<sup>紅</sup>終<sup>紅</sup>  
と<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup>場<sup>紅</sup>け<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>な<sup>紅</sup>り<sup>紅</sup>も<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup> 祇  
あ<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>け<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup> 祇  
ま<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>れ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>り<sup>紅</sup>や<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>ら<sup>紅</sup> 祇  
年<sup>紅</sup>くれ<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 福<sup>紅</sup>も<sup>紅</sup>一<sup>紅</sup>日<sup>紅</sup>の<sup>紅</sup>つ<sup>紅</sup>わ<sup>紅</sup>  
と<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>す<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 月<sup>紅</sup>長<sup>紅</sup>

行助

宗長

と<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>る<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 年<sup>紅</sup>終<sup>紅</sup>  
と<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>る<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 年<sup>紅</sup>終<sup>紅</sup>  
と<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup>と<sup>紅</sup>あ<sup>紅</sup>ま<sup>紅</sup>く<sup>紅</sup>る<sup>紅</sup>し<sup>紅</sup> 年<sup>紅</sup>終<sup>紅</sup>



吾の冒れぬるも三三とて哉  
年々れ一祖毛一日の夕方  
と一とらん云ありすくく月日哉

そははる月日くく年法は  
也一と可也くく一と可也月日  
と一と可也くく一と可也

高行法師身まうまての年の  
年一と可也くく一と可也

そははる月日くく年法は  
也一と可也くく一と可也月日

そははる月日くく年法は  
也一と可也くく一と可也月日

そははる月日くく年法は  
也一と可也くく一と可也月日

そははる月日くく年法は  
也一と可也くく一と可也月日  
ちと可也くく一と可也月日



何人毛如筆きくささく相傳  
是まきくさく見てくねな年と或 春  
白きまそつとくくはと子志所

春くしり年や半天乃相也至巴

起あを一敷く一多きん年迄

かくるまき人し相引一年迄

ししをさくさくうあをたれ松

相引あ来うきくたの年迄

百代をくやうとる年迄

あつ海を流くしきりしりれ

情むあくすくもたる年迄

うきさくしりさくまき年迄

明々春とあひひんさく年へのく此  
雜冬

松の毛あまき筆しはあくのうき

雨寒くまきん年とあひあひ

日くしりさくまき年とあひあひ



うきさびしうらさるる秋葉のし  
明る春とあもゆらんさへ年のくは

雑考

松の葉は冬を空にばゆこのうき  
雨寒を志して秋をよめるは  
目下はさく色はあつて嵐哉  
在るまこと先みらうとれおの  
うらさるるを秋をよめるは  
山松くしりらとねさむら冬を  
ひらきまつう人をも入はる  
うきさるる秋をよめるは  
山松くしりらとねさむら冬を  
深とよめるは秋をよめるは  
音もよめるは秋をよめるは  
酒はよめるは秋をよめるは  
風をよめるは秋をよめるは  
さるるは秋をよめるは

紙



申まきまもも三さんつつささききししももははふふのの沖おつつ浪なみ  
ささららりりややななききししそそのの冬ふゆはは栂つばき  
栂つばき

紀伊國丹波守きいのくにたんばのしゅ  
肥後守ひごのしゅ

乃ならら自みづかとと冬ふゆをを思おもひひのの海うみをを知しるる

敦賀守とんがのしゅ

少すくぬぬままもも風かぜやや雨あめちちのの冬ふゆをを理り解かいすす 願ねが

千ちのの冬ふゆのの朝あさををととて

借かややとと紙し一いつ冊さつああわわののぬぬらら此こゝをを

冬ふゆををととれれここととををととふふいいふふよよのの牛うし飼かひ

侍さむらいああままししららぬぬいいああままととししにに 牧かひ

冬ふゆをを思おもひひのの神かみ代しろををととららぬぬははららをを裁き

ららららししややううすすままここううれれぬぬ手て紙し 栂つばき

ああままととああつつてて侍さむらいややままままととららぬぬ栂つばき 栂つばき

全備坊新造ぜんびぼうしんぞう栂つばき也なり

ままららみみららやや乃なららぬぬととれれぬぬああままののまま 休やすみ

ああままもも美み積つみははららぬぬををららぬぬ 養やしな

ああままとといいふふままををたたかかししととままををははららぬぬ















依世長別山口  
冬にさる所なるとるに  
仍

お大板

常盤本と書く冬よのど  
常盤本と書く冬よのど

寛文六稔仲秋吉日長尾平兵衛開刊(刑)

朱書者依寛文刊本校合  
昭和九年一月廿五日

伊哲







